

指導資料

特別支援教育 第161号



鹿児島県総合教育センター

- 小, 中, 特別支援学校対象 -
平成23年4月発行

ICFの視点を取り入れた自立活動の指導とその充実

特別支援学校の新学習指導要領では、自立活動の目標や内容に大きな改訂がなされた。その背景の一つに、WHO（世界保健機関）がICF（国際生活機能分類）を採択したことに示される障害のとらえ方の変化がある。

このことは、「児童生徒の実態把握が一面的で、自立活動の指導が、障害の困難さのみに注目しがちである」、「自立活動の時間における指導の指導内容や指導方法が、他の教科等の学習場面や生活全体に結び付きにくい」など、これまで指摘されてきた課題の解決へ向けて、手掛かりを示すものである。

そこで、本稿では、ICFの視点を取り入れて、自立活動の指導内容等をどのように設定していけばよいのか、具体的な例を示しながら述べることにする。

1 ICFとは

ICFでは、人間の生活機能を「心身機能・身体構造」、「活動」、「参加」の三つの要素から構成されるものとし、それらの生活機能に支障のある状態を障害ととらえる。そして、生活機能と障害の状態は、健康状態や環境因子などと相互に影響し合うと説明されている（図1）。例えば、肢体不自由のある児童生徒が、買い物に行きたいけれど行くことができないという状態を想定する。

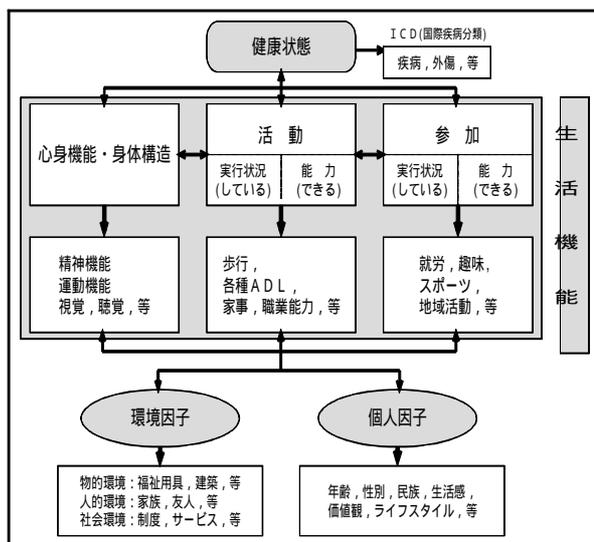


図1 ICFの構成要素間の相互作用
(概念図: 具体例が入ったもの)

出典1) 『特別支援学校学習指導要領解説自立活動編』

その場合、下肢まひがある（心身機能・身体構造）、移動が困難である（活動）、買い物に行けない（参加）という生活機能の面や、上り坂が多い、車椅子の性能が低いなどの環境因子などを総合的にとらえていくことが大切になる。

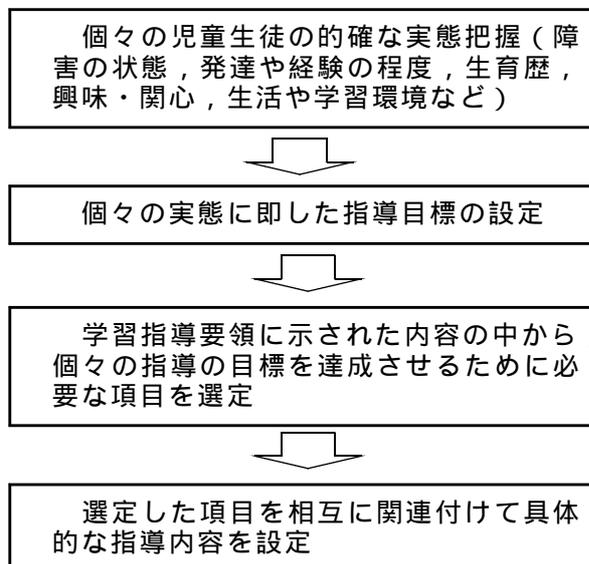
このように、ICFの考え方に基づいて児童生徒をとらえていくことは、次のような点で重要である。

児童生徒の生活全体を見通し、「活動」、「参加」することを前提に児童生徒の困難さや可能性を考える。つまり、児童生徒の実態把握や指導課題の設定、指導の成果の還元などが、これまで以上に生活に結び付いていくことになる。

「環境因子」や「個人因子」の面に一層目を向け、「活動」、「参加」をどのように支えていくのかを考えていく。つまり、学習環境や教師のかかわり方、家族や地域の人々の支援など、児童生徒を取り巻く広い視野から児童生徒を理解し、支援の在り方を考える。

2 自立活動の指導計画作成と配慮事項

このようなICFの生活機能や障害のとらえ方に基づく、自立活動の指導における個別の指導計画作成の手順例を示す。



今回の学習指導要領の改訂では、このような手順がより具体的に示されるとともに、以下のような指導内容設定の配慮事項が示された。

(1) 主体的に取り組む指導内容の設定

児童生徒が興味をもって主体的に取り組む、成就感を味わう観点に加えて、自己を肯定的にとらえることができるような指導内容を取り上げる。例えば、自立活動の学習に取り組む自分について振り返る機会を適宜設定したり、児童生徒の意見を取り入れながら学習課題を設定したりするなどの方法が考えられる。

(2) 改善・克服の意欲を喚起する指導内容

児童生徒の意欲を喚起するには、実際的な経験等の具体的な学習活動を通して指導することが大切である。

(3) 遅れている側面を補う指導内容

児童生徒の発達の進んでいる側面を更に促進させることによって、児童生徒の

自信と意欲を喚起し、遅れている面の伸長や改善を図ることに有効な場合も少なくないことから、発達の進んでいる側面にも着目する。

(4) 自ら環境を整える指導内容の設定

例えば、肢体不自由のある児童生徒が、急な坂道で車椅子を押すことを周囲の人に依頼する方法について学ぶことなどを計画的に取り上げることが考えられる。その際、求める環境を自分で判断し、必要に応じて再依頼することを体験的に学習したり、依頼を受けて支援する経験をするにより、依頼を受ける側の心情にも配慮したりする指導が大切である。

3 ICFの視点を取り入れ、生活に結び付くことを目指した自立活動の指導の具体例

ICFの考え方に基づき、「活動」や「参加」などの生活機能や環境因子、個人因子などの面から児童生徒の生活全体を見通して実態をとらえ、自立活動の指導の目標や内容、方法の検討を行う一連の流れを、以下に具体的に示す。

(1) 対象児の概要

児童A（特別支援学校 小学部3年）

【心身機能・身体構造】

- ・知的障害，自閉症 ・注意の集中・持続が難しい。
- ・大きな音や友達の泣き声が苦手である。
- ・自分の思い通りにならないと不安定になる。

【活動・参加】

- ・自分から人にかかわりを求めることは少ない。
- ・教師の行動を模倣する。
- ・日常的な指示は分かる。
- ・単語，直接的な行動などで要求する。
- ・絵や写真をよく見る。
- ・目的や方法が分かると根気強く取り組む。
- ・次の行動に移るときに，逸脱した行動になりがちである。
- ・家庭では地域の行事に参加し，雰囲気慣れてきた。

【環境因子】

- ・学習空間が，雑然としている。
- ・学習の流れが場面ごとに変わり，見通しがもてない。
- ・教師の働き掛けは，言葉掛けのみによる指示が多い。
- ・両親は，地域の行事に積極的に参加させている。

【個人因子】

- ・一度失敗すると，立ち直りに時間がかかる。

(2) 自立活動の具体的な指導内容の設定

ここでは、学習指導要領解説自立活動編に示された手順を参考に、具体的な指導内容を導き出す例を示した。まず、実態把握から得られた情報を自立活動の区分から整理し、目標を焦点化した。そして、必要な項目を選定し、それらを相互に関連付けて指導内容を設定した。

A児は、簡単な指示の理解や単語でのや

りとりはできるが、人とかかわる力が弱く、自分の要求を伝えることは少ない。そこで、他者との気持ちの共有や要求を伝えようとする力などを高めるとともに、コミュニケーション手段を拡大することが課題であると考えられる。また、指導を進めるに当たっては、「指導上の留意点」にあるような環境因子等から考慮される点についても取り組みたい。

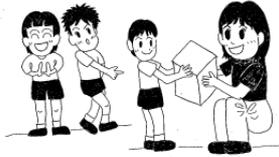


図2 A児の自立活動の具体的な指導内容例

(3) 活動例 (「自立活動の時間における指導(同じような課題のある児童の小集団活動)
: 歌や遊具などを介したやりとり遊び」に関する一単位時間の活動例)

- 1 活動名 箱積みゲーム(小集団活動)
- 2 目標
 - (1) 教師の動きを模倣して、サイコロを振る 箱を探す 箱を積む。
 - (2) 教師や友達が箱を積む様子に注目する。
 - (3) 笑顔や発声、単語などで楽しい気持ちを表す。(遊びを楽しみ教師と情動を共有する。)
- 3 実際

主な学習活動	指導上の留意点
1 今日の活動について話し合う。 (1) めあてを知る。 みんなで箱積みゲームをしよう。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師がサイコロを振って見せたり、箱を積んで見せたりすることで、活動への意欲を高める。 ・ ゲームの流れや児童の順番を絵や写真で示し、活動の見通しをもてるようにする。
(2) 箱積みゲームについて知る。 ゲームの方法 ゲームをする順番 A児 B児	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教師の動きの模倣が難しい場合は、次のような段階的な支援を行う。 教師は視線を向けながら少し待つ。 「君、サイコロしようか」と言葉掛けする。 教師が言葉掛けし、サイコロや箱を指さす。 教師が動きのモデルを示す。そのとき、「先生がコロコロするから見ててね」と教師が自分を指さしながら言葉掛けし、児童の視線が教師に向いているか確認してから行う。 教師が児童の手をとって一緒に行う。
2 箱積みゲームをする。 (1) サイコロを振る。 (2) 出た目の色の箱を探す。 (3) 探した箱を積む。 <箱が倒れる> (4) 箱を倒した人は、みんなにくすぐられる。 (5) 友達は、倒した人をくすぐる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 他児の動きに注目させるために、教師は表情や身振りなどを大きくしたり、言葉掛け(「見て見て」、「ほらほら」など)をしたりするなど工夫する。
3 ゲームで楽しかったことなどを振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 箱が倒れるときには「ぐらぐらー」「おととと」「セーフ」「あーあ」など、教師は遊びの様子や児童の気持ちなどを大きな動きや言葉掛けによって示す。そして、視線を児童に向けてアイコンタクトを誘う。 ・ 本時の活動の様子を教師が言葉にしたり、簡単な絵に表したりして、お互いに楽しかったことや頑張ったことを共有する。



本児が好きな写真や絵カードを活動に取り入れて主体的に取り組めるようにする。
【主体的に取り組む内容】

本児のもつ「教師の行動を模倣をする」力を生かし、活動を構成する。
【発達の進んでいる側面に着目する】

本児の状態像から、教師が見ているものに本児が視線を合わせるなどの他者への気付きを促す活動は、今回の学習指導要領改訂で新しく示された区分「人間関係の形成」などに係る重要な内容である。

自己を振り返る活動を適宜設定し、頑張ったことを認め合えるようにする。
【自己肯定感を高める】

出典2): 『自閉症のための社会性発達プログラム-意図と情動の共有による共同行為-』を参考に作成

ここに示した学習活動や留意点が、生活単元学習の学習内容や休み時間等における遊びの中に、意図的に設定されることにより、A児の「活動」や「参加」が、学校生活全体の中で拡大していくと考える。

以上、ICFの視点を取り入れ、児童生徒の実態把握や具体的な指導内容の設定などを検討した。今後更に、様々な障害の特性等に

応じた実践を重ね、一人一人の生活に結び付いた自立活動の指導の充実を目指したい。

- 引用・参考文献 -

- 1) 文部科学省『特別支援学校学習指導要領解説 自立活動編(幼稚園・小学部・中学部・高等部)』平成21年6月 海文堂出版
- 2) 長崎勲・中村晋・吉井勲人・若井広太郎『自閉症のための社会性発達プログラム-意図と情動の共有による共同行為-』2009年9月 日本文化科学者
国立特別支援教育総合研究所『ICF及びICF-CYの活用: 試みから実践へ-特別支援教育を中心に-』平成19年9月 ジアース教育出版

(特別支援教育研修課)